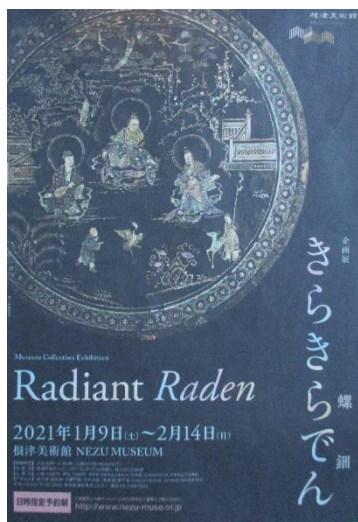


きらきらでん（螺鈿：らでん） Radiant Raden

根津美術館（東京・南青山） 2021.01.09～02.14

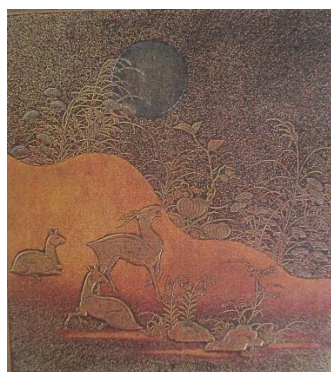


螺鈿は、輝く真珠層を持つ貝を文様の形に切り抜き、嵌め込んだり、貼り付けたりして装飾する技法で、「螺」は巻貝「鈿」は貝で装飾するという意味である。

工芸手法は、貝殻の内側、紅色光沢を持った真珠層の部分を切り出した板状の素材を漆地や木地の彫刻された表面に嵌め込み、貝片の色は、単なる白ではなく、内から放光するかのような青から赤の色調・濃さが連続的に変化してきらめきを持たせる技術である。

その貝と漆独特の美しい艶と織りなされる世界は、主に漆器や帯などの伝統工芸に用いられる装飾技法のひとつとして古来より多くの人々を魅了してきた。

本展は、当美術館の螺鈿所蔵品を中心に、日本における螺鈿技術の受容と展開の歴史をたどりながら、13～15世紀時代に発展した中国大陸・朝鮮半島・日本・琉球と「きらきら螺鈿」の魅力をも十分に堪能することができる企画展である。



漆工 《樹下人物螺鈿硯屏》 14～15世紀（中国・元～明時代） 上図
古代中国の三聖人と思われる人物が中央に表され、衣服の精細な模様の切り抜き、見る角度で色鮮やかに光る「夜光貝」は薄貝螺鈿の魅力に溢れた作品。

《春日山蒔絵硯箱》 室町時代・重要文化財 左図
満月に照らされた秋草の中で鹿3頭が遠く山上で鳴く様子が描かれている。

《花白河蒔絵硯箱》 室町時代 重要文化財 中図
四隅を入隅にした被蓄造りで、胴張があり塵居を設けて、桜の幹と岩には「花・白・河」の文字が克明に描かれた意匠が描かれていることが特筆できる。

漆工 《桜螺鈿鞍》 13世紀（鎌倉時代） 重要文化財 右図
華やかな中世時の鞍で、黒漆地に厚めの夜行貝で満開の桜山が描かれている。